

# チョンガレ系目蓮盆踊唄初攷

吉川良和

## はしがき

竺法護すなわち Dharmarakṣa が 300 年頃に訳したといわれる『仏説盂蘭盆經』は、盂蘭盆会の縁起となった仏教經典としてつとに有名である。ただし、これは後代の偽經という説も強い。とはいえ、この仏經故事は以降飛躍的に発展し、周辺諸国でも様々なバラエティーにとんだ目連物語を生みだしてきた。わが国にもいちはやく伝わり日本的な展開をみせた。それらについては、すでに論じたことがある<sup>(1)</sup>。その中で現存する芸能として重要な北陸地方の盆踊唄『目蓮尊者地獄巡り』(以下『地獄巡り』と簡写、また「連」はわが国で仏教に係する「蓮」を好んで用いるのでそれにしたかった)についても、華文で紹介し論じたことがある<sup>(2)</sup>。この『地獄巡り』については、倉石武四郎、川口久雄、および岩本裕の三博士、そして石破洋、陳芳英両氏もすでに言及されている<sup>(3)</sup>。筆者がこの芸能に接したのは、1991 年、齋藤雅美氏が「地獄劇と来迎会」を国立劇場で企画し上演されたときが最初で、今日まで完全な形で遺存しているわが国の目連故事芸能の存在をこの時に確認し得た。わが国には目連故事の資料が少なからず残っているが、今日なお上演されている首尾一貫した長編の芸能は、この『地獄巡り』以外、鑑賞したことがない。そこで、筆者はこの貴重な今日まで伝承されてきた『地獄巡り』の資料を収集して、その故事内容や芸能的特徴を闡明したいと思うにいたったのである。

ところで、『地獄巡り』の資料は決して少なくない。だが、筆者が目撃した北陸地方のそれら『地獄巡り』の諸本を校合する過程で、倉石博士から陳氏まで、さらに国立劇場で上演されたものもふくめ、じつはすべてが同じ系統に属し、また、その他の遺存詞章もやはり一つの系統に属する伝承であって、結局、北陸の『地獄巡り』盆踊唄は二系統になっていることが判明した<sup>(4)</sup>。そこで、拙論では、前者を A 系統、後者を B 系統とよぶことにする。目下、福井のものは微しえないが、大別すると、A 系統のものは石川県に、B 系統の『地獄巡り』はおもに富山県に伝わる。だが、この二系統の

流行地域が歴然と区別できるわけではなく、A系統はその流行範囲も広いようで、富山県にもA系統の伝承があり<sup>(6)</sup>、他の地域でも版本が出されている<sup>(6)</sup>。これに対して、B系統の方はおおむね富山県に限られているらしく、しかも書写法（漢字の宛字、濁点、変体仮名など）も種々あり文字の異同も少なくない。かつ仏教用語などが、方言の発音どおり音を表記しているので、難解なところがかかなりある<sup>(7)</sup>。そのためか、B系統の『地獄巡り』をとりあげて専論したものを、寡聞にしてきかない<sup>(8)</sup>。A系統はすっきりと内容が整ってわかりやすいが、芸能的立場からみれば、このB系統の詞章はA系統にくらべてはるかに優れて「語り物」的で、内容が豊かである。そこで、拙論はB系統『地獄巡り』をとりあげ、その語り物芸能的特徴を探索したい。

さて、筆者が初めてB系統『地獄巡り』の詞章に接したのは、『日本庶民生活史料集成』（第十七巻）で、そこには礪波市鷹栖の『目蓮尊者』と東礪波郡井波町の『目蓮尊者地獄巡記』というチョンガレ（もと錫杖・鈴などを伴奏にした早口唄から始まり、語り物歌になった）二曲が掲載されており、かつ五来重博士の解説がつけられている。これを校合してゆくうちに、A、B両系統にはかなりの異同があり、かつわが国目蓮物『もくれんのさうし』<sup>(9)</sup>、二種の説経節正本『目蓮（八文字屋版は「連」）記』<sup>(10)</sup>、民俗芸能『鬼来迎』<sup>(11)</sup>、さらには能の廃曲『目蓮』<sup>(12)</sup>などのいずれにもない、興味深い内容と表現が含まれていることを知った。『地獄巡り』は「盆踊唄」ではあるが、両系統ともに「口説（段物）」として「語り物」に属し、疑いなく現行芸能として、わが国目蓮物で重要な位置をしめている。A系統については、諸論文でしばしば言及されている。それに対して、B系統は注目を惹かず置かれていた。それは整理されておらず、上述の理由で厄介だからであろう。筆者もそれを痛感し、対照、校合すべき他の資料を踏査に富山県の西礪波郡福光と東礪波郡井波などをおとずれたところ、聊か得るところもあったので、ここに論述し大方の示教を仰ぐ次第である。

## 1 チョンガレ系『目蓮尊者地獄巡り』の諸本

A系統『地獄巡り』は、文字の異同も比較的少ない。それに対して、チョンガレ系の方は版本の存在も確認しえないし、ただ毎年盆踊で唄うための伝承として書きとめたようにみえる。定本とみえるものでさえも、誤読の可能性も十分ある。とにかく、筆者が目撃できたのは以下の数本で、拙論はこれらを根拠として述べたい。

### 1・1 五来重編『日本庶民生活史料集成』第十七巻「民間芸能」

〈萬歳・チョンガレ節・口説き〉(三一書房 1972年) 所収資料。

- ① 礪波市鷹栖チョンガレ活字本(原本明治二十一年抄本)『目蓮尊者』(七段以下欠;四段目まで他のチョンガレ系とほぼ同じ,ただ長い五段目だけを便宜上数分割した3部分が現存)492頁~496頁。
- ② 井波町チョンガレ活字本(原本昭和十二年抄本)『目蓮尊者地獄巡記』(五段)515頁~520頁。

### 1・2 福光図書館所蔵

- ① 謄写版本『砺波の民謡・ちょんがれ集』(斎藤五郎平 自家出版 1981年)。13頁~32頁。
- ② 活字本『ちょんがれ選集』所収資料(福光ちょんがれ保存会編 2002年)。1頁~14頁。

### 1・3 富山県東礪波郡井波町図書館蔵写本

- ① 「ちょん加理ぶし」和綴り抄本『目蓮道行』(初段途中まで) 富山県東礪波郡イゼミ村 明治三十年六月 前川與助(書写) 九丁
- ② 「ちょんかれふし」和綴り抄本『目蓮獄地巡り段』(四段を5分し,それと五段の初めだけで未完) 東礪波郡大字西院瀬見村 明治参拾参年拾月中旬 前川作平(書写) 七丁
- ③ 吉田重太郎原稿用紙抄本『目蓮尊者地獄巡記』(井波図書館:昭和三十三年五月十五日重写) 頁数未記入。
- ④ 高田佐助・宮協理四郎・山本左吉等原稿用紙抄本『目蓮尊者地獄巡り』(昭和十二年~二十二年の間数回) 1頁~17頁。

### 1・4 黒坂富治編『富山県の民謡』(北日本新聞社 昭和54年8月1日)

- ① 礪波郡福光町で採取された『目蓮尊者』(初段・二段) 326頁~329頁。
- ② 「さかた」『目蓮尊者地獄巡り』(初段・二段) 342頁~344頁。

### 1・5 『富山県民謡緊急調査報告』

(富山県教育委員会 昭和60年3月30日) 所収の詞章

- ① 東蟹谷・水落で採取された『目連尊者地獄めぐり』(初段) 117頁。
- ② 上平村で採取された『目連尊者地獄巡り記』(五段) 180頁~186頁。

- ③ 福光町で採取された『目蓮尊者』(初段) 211 頁。
- ④ 城端町で採取された『目蓮尊者冥途行願』(初段) 159 頁～160 頁。

#### 1・6 『金沢の口頭伝承』(金沢市教育委員会 1984 年 8 月)

- ① 『目蓮尊者』(初段～五段) 79 頁～86 頁。\*附記に諸本を校合して纏めたとあり、特定の原本を根拠にしたものではないので、参考にとどめた。

### 2 チョンガレ系『目蓮尊者地獄巡り』各段の内容

北陸地方に伝承されてきた『地獄巡り』は上記のとおり二系統に分けられる。もちろん内容も異なるが、初段の冒頭ですぐに区別がつく。B 系統は、この盆踊唄が 7 月 15 日の「千部施餓鬼の由来」を語るのだと表明し、一方、A 系統は、「日本大和の国、壺阪寺の如意輪観音の伝記」を申し上げるのであると違っているからだ。もっとも、B 系統も末段に壺阪寺の観音様とあり、ともに施餓鬼の縁起という大筋で内容的には一致しており、原型は同じではないかと推察できる。だが、筆者の関心はこれが「口説」の語り物で、B 系統がよりその芸態を色濃く保持しているところにある。以下、井波町の『目蓮尊者地獄巡記』を本とし必要に応じて他本を引用、照会しながら、各段の故事内容を略記したい。

#### 初段

7 月 15 日が施餓鬼の日で、その「施餓鬼の由来」を申し述べるという出だしである。その後、釈迦が衆生を救うために 8 千余度も来迎されたと述べる。そして、釈迦の弟子 8 万余人から選りすぐり選りすぐって、最後は阿難尊者、富楼那尊者、そして三の弟子に目蓮尊者がおり、施餓鬼の由来、すなわちこの「目蓮尊者」の話語りをはじめ。目蓮は 5 歳で父をうしない釈迦に弟子入りする。7 歳で母にも死別する<sup>(13)</sup>。23 歳まで修行し習ったお経が 7 千万巻。ある日、精舎の庭にある梅の古木(梢)に白鳥が巣をつくり 12 の卵をうんだ。雄鳥と雌鳥がかわるがわる温めるのをみて親子の深い因縁と親の恩に思いを致し、亡き父母の行方を知ろうとする。そのために寒気に丸裸で「立経読」し、昼は法華経の御文をめくり昼夜分かたず修行したが、ついに両親の行方はわからなかった。そこで釈尊に乞うと、このようにつけた。父は「原内国」<sup>(14)</sup>の「襦茨輪大夫」<sup>(15)</sup>といい、大善人。九重の塔を建て、辻々には地藏菩薩を建立し、大河には舟をつなぎ、小川には橋をかけ、難儀な人を救い、寺院には多くの寄進

をした<sup>(16)</sup>。だが、54歳で亡くなった。野辺の送りには紫雲たなびき、諸仏や菩薩たちに付き添われ管絃の響きもめでたく、悟りを開いて安楽無限の世界にいった<sup>(17)</sup>と。聞いて目蓮うれし涙にくれる。

## 二段

次に母の居所をたずねると、釈尊は聞かないほうがよいというが、ぜひと願うので、こうつけられる。母は「處大病人」<sup>(18)</sup>という大悪人。父の建てた塔、地藏、舟、橋などをこわし、偶々連れられていった彼岸の説法にも、僧の言うことはみな嘘だと非をとなえ<sup>(19)</sup>、また僧の着ている綺麗な袈裟などを目にすると、それを息子の目蓮になんとしても着せたいと執着し心の盗みをした<sup>(20)</sup>。この邪慳の母は32歳で亡くなったが、父とは大違いで、野辺の送りに晴天が瞬時にくもって雷が光り鳴る中、天空から鬼神が下りて棺桶から母の死骸をつかみ出そうとしたところに、阿難尊者が現れ袈裟や衣を投げつけたので死骸は放置していったが<sup>(21)</sup>魂を業の炎の車に乗せて死出の山を越え<sup>(22)</sup>、閻魔殿にもちさった。閻魔はそこで、この魂の罪を「業秤」で計ったところ、「秤錘は千人吊りの、岩の錘あそばしければ、僅か小さき魂ばかり、四寸四方の御皿の中に……岩の錘は宇天迄飛び上がる、業の魂は大地に沈む（鷹栖本は「大地へとめり込むなり）」<sup>(23)</sup>。これは並大抵の罪人ではないと、浄玻璃の鏡で生前の姿をうつさせると<sup>(24)</sup>、4万8足の鱗に業の頭には22の角、四角八角の眼、それに火焰吹き出す有様。これは八万地獄行きだと即決され、獄卒たちに連れられて地獄に墮ちた<sup>(25)</sup>と。目蓮は涙をながし嘆く。

## 三段

母を尋ねに地獄巡りをするため、目蓮は釈尊に暇を乞い、百日百夜の暇をもらう<sup>(26)</sup>。地獄の「四つ峠」をしのぐ「かん原笠」「かん原蓑」<sup>(27)</sup>「耆婆の靴」<sup>(28)</sup>も頂く。自分も、笈に法華経、浄土三部経<sup>(29)</sup>、血盆経<sup>(30)</sup>、地藏経を入れ、衣、袈裟、笈摺を着、紫檀の矢立を腰にさして出立した。やがて冥途との境「六道の辻」で途方にくれてしまったが、地藏経を読誦すると、6人の僧が現れ三途の方向を知らされる<sup>(31)</sup>。河原にやってくる<sup>(32)</sup>と、流れは急で幅がひろい。そこで法華経を1巻読誦すると、大蛇が現れる。慈悲で渡してくれれば、善果を得させると申し出る。大蛇が首をうなだれたので、目蓮はそれに乗って三途の川を渡ることができた<sup>(33)</sup>。渡りきると、その大蛇は釈尊がよこした阿難尊者であった<sup>(34)</sup>。目蓮は礼を述べると同時に、母が渡るのに自分よりはるかに難儀したろうと涙にくれた。

#### 四段

ほどなく葬頭の河原で姥に遭う<sup>(35)</sup>。肌着をはぎとり木に懸けて罪の軽重を計る。肌着がなければ皮をはぐと脅される<sup>(36)</sup>。姥に母に会いに来たと来意をつげたが取りあわないので、法華経などを読誦すると、姥は自分の苦患もしばし逃れられると合掌し、お礼に衣領樹より母がはぎとられた肌着を返してくる。その後、「剣峠」「火降り峠」「磐石峠」「暗がり峠」の「四つ峠」（死出の山）という難険な峠に遭遇したが<sup>(37)</sup>、釈尊より賜った「かん原笠」「かん原蓑」「者婆のくつ」と法文を唱えて難所をしのぎ、つぎに子を産まぬ女が責められる「不産の地獄」<sup>(38)</sup>を通り過ぎる。

#### 五段

続いて血の池地獄では、向こうが浄土と急き立てられる女の亡者たちが細い橋を渡ろうとすると、真ん中からぶつりと切れて、そのまま地獄に墮ちるのを見る<sup>(39)</sup>。哀れに思った目蓮が『血盆経』を女人橋の上から読誦し、「南無阿弥陀仏」と書いて血の池に投げ込むと、すべての罪人がみな成仏をとげた。それなのに、目蓮の母は罪が深くて行方がわからなかった。そこで、目蓮は八万地獄の門までやってくる。ところが門番の獄卒にたのんでも鉄の扉を開けてくれないので、「南無阿弥陀仏」と唱えながら三遍書いて四方の諸菩薩に祈願すると、鉄の門が抜けた<sup>(40)</sup>。その後、紺屋地獄などをめぐって八面大王に遭い来意をつけるが、母に会わせてくれない。目蓮があまり懇願するので、大王は金棒で三遍かきまわし金棒の先につきさした母をみせる<sup>(41)</sup>。骨と筋ばかりで目だけが光りがかやいている母のあわれさにむせび泣いて、ぜひ娑婆の姿にもどしてほしい、歳は32であったと懇願する。だが、大王が力を貸さないで、『血盆経』を声高らかに読誦すると、釜の深さが2丈にへり、さらに経文を書いてなげこむと1丈ばかりになった。罪人共は釜の縁にはい上がったが、母だけは罪が深くて下に沈む。目蓮が母の名を大声で呼び、手のお経で招きよせると母が縁へはいあがったので、その手をしっかりと取って引きあげた。母は罪を悔い地獄の苦患を述べたので、目蓮が浄土三部経などを読誦すると、経の功德で地獄の釜と蓋が割れ、罪人たちが釜のまわりを両手をたたいて左回りに（神事廻り）三遍まわった。ここで、「これがこの世の踊りはじめ」と盆踊の由来を述べる<sup>(42)</sup>。

罪人たちが躍り上がって喜んでいところに、諸仏、菩薩や管絃をのせた弘誓の舟がやってきて迎えるのを見て、母は息子の目蓮が救いにきてくれたから自分は当然だが、あの餓鬼共は「なんのよしみで浮かんだやら」と邪慳なことをいうや、雷電、稲妻がたちまちおこり、もとの地獄に墮ちてしまった<sup>(43)</sup>。これはもはや術がないと思い、釈

尊のところにもどって仔細を述べ「仏の方便力で母を浮かべて下されませ」と哀願する。すると、釈尊は施餓鬼の供養をするように勧める。そして、釈尊と8万余人の弟子があつまり『施餓鬼御経』を声を張り上げて読誦すると、その功德で母は浮かんで幽霊となり釈尊のところに来た<sup>(44)</sup>。そこで羅漢たちもみな歓喜の涙で喜びあい、目蓮は釈尊に母の仏果を願いでると、「大和の壺坂寺の弥陀の協立観音様と封じ込めるぞ、喜びあれ（福光本）」と言われたので、「目蓮満足なされ言うて尽きせぬ御咄なれど、先は略して筆止めます」と全編を結ぶ。

以上が、チヨンガレ系『地獄巡り』の梗概である。

### 3 B系統『目蓮尊者地獄巡り』の構成

筆者は中国の語り物用語が語り物の構成分析に有効ではないかとの前提で、目蓮物説唱をあつかったことがある<sup>(45)</sup>。いまここに、それをもってこの『地獄巡り』の構成を分析してみたい。『地獄巡り』の語りの要素もすべて、以下のカテゴリーに入るはずである。なお、A、B 両系統の詞章は鷹栖本1本をのぞいて、浄瑠璃に似せ五段組になっている。そこで、これも井波町本『目蓮尊者地獄巡記』を主に、他のB系統諸本と、A系統や他の目蓮物中の表現をも対照しながら述べてゆきたい。

#### 3-1 登場人物の台詞「官白」

主要人物の「官白」は登場順に、目蓮、釈尊、父と母、閻魔（前三者は釈尊の官白中に現れる）、6人の僧侶、大蛇（即ち阿難）、葬頭河姥、地獄の門番、八面大王、母らで、すべてに対話「官白」があって、それがB系統に語り物としての精彩を放たしめている。また、「我父母迷土の行方知らせ給へ」（初段）という目蓮の釈尊に対する懇願の官白で事実上全物語が始まるが、これはA系統も同様だ。だから、これは現代我々が見聞きする盆踊歌などとは全く違って、官白が多出し、極めて語り物的なのである。全編の官白は意思の伝達に留まらず、地獄で母に目蓮が「この目蓮は、あなた（井波本のみ「僧」）ひとりに逢いたいばかり、難所しのいで尋ねてきたぞ」と言うなど、人物の性格、心理を如実に表す警拔な詞章が多い。

#### 3-2 登場人物の自己紹介「官白掛口」

A系統が説明口調なのに対して、B系統は題名どおり、目蓮が地獄を巡りながら体験する過程をおって語っており、臨場感に溢れている。目蓮は遭遇する「人物」に必ず

「官白掛口」をするが、これが「套語」(後述)になっている。目蓮以外の人物にないのは、語り手が恐ろしさを加えて「開相」(後述)する必要からと思われる。

### 3-3 他の登場人物がいるときの独白「官咕白」

二段の閻魔大王が悪人の母について「さても怖ろしこの罪人は、並や大抵の者ではないぞ」と2回叫び、娑婆の相を見るために、「嘘を言われぬ浄玻璃鏡、これで分かる」と映させる。これらは誰かとの対話ではなく、心の裡を周囲の者に伝えているのだ。同じ二段の釈尊の官白で、母の「あのや坊主の言はれる事も、此のや和尚の語れる事も皆んな嘘じゃ」は官咕白の変型で、これで罪業をより明確にしている。三段の大蛇に語りかける「何卒性あるならば、おれの事、静かに聞けよ」の套語とか、また宗教的語り物特有の「読誦」や唱えごとも、じつは官咕白で多用される。それは釈尊や諸菩薩などとの対面を想定するもので、やはり官咕白なのである。五段で餓鬼も救われたのを見て「あの餓鬼共は、何のよしみで浮かんだやら……」と言った母の慳貪の官咕白が最も目蓮故事では重要であろう。これは尋常な罪人ではなく、それを救った目蓮は釈尊の加護があったにせよ、さらに尋常な僧侶ではないことを強調するからだ。

### 3-4 他の登場人物がいないときの独白「私咕白」

初段で親鳥が卵を温めるのを目蓮が見て、「われは御慈悲の父母様の御恩送りし覚えもないし、……ここに父母様の過ぎし行方を尋ねてみよ」と決意を私咕白する。二段末で、「いたわし母人さんや、後へ帰らぬ有様なり」と地獄の母の境遇がわかって憐れみ嘆く言葉。三段の三途の険しい流れを見て「あわれいとしのわが母様は、なんとこの川どうあそばした」と同情の私咕白。B系統三段の末で、大蛇に変身した阿難の救済を受けて別れた後、悦びの「兄の弟子の阿難と知らず、兄の頭上に扱打乗りて、不礼一つの真平御免」は、恐怖の大蛇と葬頭河姥の間に挿入された滑稽な私咕白だ。五段の血の池地獄を干した後、目蓮は「とうとう地獄がそのまま褪せて、有罪重罪罪人どもは、みんな成仏遂げたとあるぞ」と私咕白するが、しかし母だけは見えぬので、さらに「母人さんは何とした……いとし」と続く私咕白は、後述の「心理托白」の役目をもしているのである。

### 3-5 語り手の登場人物の姓名、年齢、性別、身分、境遇に対する紹介「掛口表白」

語り物は普通主要人物の紹介を最初にするのだが、仏教の唱導説唱なので、まず重要な釈尊の「掛口表白」から始まり、次に主人公の目蓮の掛口表白に入るという異例の



形式になっている。さらに独得なのは、初段と二段で釈尊の口を借りて亡き父母の掛口表白をしていることである。即ち、釈尊が語り手となっている。発端の『仏説盂蘭盆経』では母の行く末を目蓮が「道眼」で探し当てたが、『地獄巡り』では釈尊の法力以外に知り得ないことを強調しているからである。

### 3-6 事柄の原因や経過の説明は「事柄表白」

目蓮が父母の行方を尋ねるまでの経緯で B 系統には鳥が卵を温める話や目蓮が「立経読」で知ろうとする努力があり、また母が閻魔殿に連れられること、大蛇が阿難だったとか、葬頭河姥や血の池地獄の女亡者、八面大王とのやりとり等など、B 系統は全般的にエピソードが多彩なため「事柄表白」も多くそれが興味深い語りにしている。

### 3-7 情景や建物の描写「場景表白」

『地獄巡り』はその題名どおり、地獄の「場景表白」が中心になる。二段では「業秤」と「業鏡」が置かれた閻魔殿の「場景表白」だが、地獄に旅立ってからは、目蓮が見聞した物が描写され、それらを聴衆と共有しながら「場景表白」を運用するのが B 系統の警抜な表現法である。三段の三途は「川の幅さが四万と由旬、水の流れが同じく由旬、川の勢いがまた三つ刃の矢先、遙か三途の川上見ても、せめて小さき小橋もなし、それでならぬと川下見ても、わたし舟とて一艘も見えじ」とある。「剣の峠」は「雨の如くに剣が降って、足の踏のも手にさわるのも、皆剣……」とあり、「火降り峠」は「千の松明寄せて灯す如く火が降ります。下から八万由旬、火焰もえ立つ」で、「盤石峠」は「雨や霰のさて降るごとく」と語るが、「暗がり峠」は不可視だからない。五段の「八万地獄の門」は、「悉皆熱鉄ばかり、山を見るよな七重の門じゃ。一重一重扉がありて、門の他には六つの鬼が、まなこ日月鏡の如く、にらみ付けたるその有様は、たとえ方なき恐ろしことよ」と語られる。「血の池地獄」に関しては、「地獄の向こうの岸に、清浄莊嚴浄土のかかたり……こちの岸より向こうの岸へ糸にまさしく橋をばかけて」とある。最後の施餓鬼に関して、A 系統は「場景表白」が全くないのに対して、B 系統は「施餓鬼飯をば三石六斗、外に白幡百本立て、黒き青き又赤幡も、四色数々四百の幡じゃ。又も精舎の大木毎に、灯す光は高灯籠じゃ。外に数多の飾りをなされ、御釈迦如来の祈りと致し数多御弟子も八万余人、寄せて集めて声張り上げて施餓鬼御経を御勤めなさる」と施餓鬼の縁起を語るにふさわしい場景表白がある。

### 3-8 天候の描写「天候表白」

地獄の物語だからほとんどないが、二段で鬼神が母をつかまえに降りるとき、「晴れし天気も暫時に曇り、天火稲妻はたはた雷じゃ」とある。これとて天の人為に対する「感応」の表れと取れ、象徴性が強いので自然の天候というより「比喩補白」に近い。

### 3-9 人物の外見描写「開相」

三段で、目蓮が地獄への旅姿を、「経帷子に黒の衣に墨袈裟かけて、除難の脚絆に去火の足袋や、すごうの草鞋に紐をばしめて、紫檀墨（矢）立を御（身）腰にさして、御手に瑪瑙の珠数をつまぐりて、道中姿に笈づるめされ」という「開相」で表す。四段には、葬頭河姥を「長（丈）は拾丈計り見る。頭二十二の角をばはやし、眼百千鏡の如く、色赤きは朱紅柄が、髪の毛は只針金の如く、手には九丈の鉄棒を持って眼怒らせ」との開相。浄玻璃の鏡に映った母は「四万八属鱗をたてて、業の頭二十二の角や、又は四角八角眼、火焰吹き出す其の有様」という開相。これは三段の「大蛇」の開相「十丈ばかりのなた廣大蛇……九万八属鱗をかへし、十と二つの角振り上げて、四角眼に八角たてて、火焰吹き出し舌巻き上げて……」と類似する。ともに恐怖表現で、一種の套語とみなしうる。

### 3-10 物の外見描写「物品開相」

「開相」の大蛇や、獄卒、三途の姥と八大地獄の獄卒の鉄棒は、じつは套語のような決まり文句で表現されている。後述「套語」参照。

### 3-11 人物の動作の描写「動作托白」

八万地獄に至るまでの、僧侶、大蛇（阿難）、葬頭河姥も含めて「不思議」に出現し、「目まじせんまに」「消え失せにける」と消失するのも「地獄巡り」独得の幻想的「動作托白」である。さらに、「神通第一」でありながら、目蓮は亡き父母の行方を知りえず地獄の母も救えない。「寒さの節であれど丸の裸の立経読せ、昼は法華経の御文をくらせ昼夜分かつ見給い」と強烈な信仰心を動作托白で故意に表したのも、結局は釈尊と仏経の法力が不可欠なことを強調するためだ。その要をなす「動作托白」が二点ある。第一の要は、釈尊の法力をたのみ懇願・哀願の「動作托白」である。両親の冥途の行方を教えてもらおう懇願。地獄巡りの許可を懇願。せっかく救われたが邪慳でまた地獄に墮ちたときに釈尊に「仏の方便力で母を浮かべて」との懇願などである。もう一つの要になる「動作托白」は、悪を沈め救済の阻碍を破壊するための仏経読誦と写経した経文を書いて対象に投げることである。両親の冥途の行方を尋ねるとき、

六道の辻で迷ったとき、三途の河原で渡るとき、葬頭河姥に遭って道を聞くとき、「暗闇峠」で光明遍照を求めるとき、血盆地獄の罪人を救うとき、地獄の釜の湯玉を沈めるとき、地獄の母を救うとき、釜を割るとき、邪慳で再度地獄に堕ちた母を濟度するときに各々読誦・写経の動作托白が用いられて、最後に「母は浮かんで」と善果をえる。また、目蓮の旅姿の開相で矢立を特記したのは、読誦の前には必ず「笈ずるおろし」、写経の前にも必ず「紫檀墨（矢）立のお筆をだして」と、套語の動作托白がつくからである。懇願・読誦・写経は節目に必ず表れる動作托白である。これらは法力の威力を聴衆に知らせる重要な役割で、「教訓表白」の範疇にも入れられる。

### 3-12 人物の様子描写「状態托白」

一途の信仰心をもった目蓮だからこそ、「孝心」の健気さは、「落涙」して泣いている「状態托白」によって聴衆に感銘を与え、聴衆の同情を得る。A系統では、変わり果てた母の姿を見て「七日七夜さ泣き居た」ぐらいで、ほとんど目蓮の落涙の状態托白はない。それに対してB系統は、「落涙」が節目に必ず現れる。母と死別した悲しみの涙、父の行方を知っての喜悦の涙、母が死出の山を越える苦患の涙、母の行方を聞いての慨嘆の涙。母の苦患に対する同情の涙、六道の辻で途方に暮れる寂寥の涙。僧に地獄への道を探ねる懇願の涙、僧と別れてのわびしさの涙、三途を渡って母の苦患に同情しての涙。阿難と別れて寂寞の涙、姥に次の地獄を探ねる懇願の涙、姥と別れて寂しさの涙。血盆地獄の女罪人に対する同情の涙、地獄の門が開くよう祈念の涙、三カ所の地獄を巡って苦患と悲しみの涙、八面大王に母と逢わせるようにと哀願の涙、変わり果てた母の姿を見ての悲痛の涙、母と言葉を交わしての喜悦と悲哀の涙、邪慳のために再度地獄に堕ちた母の救済を積尊に哀願する涙、救われた母の喜悦の涙、目蓮も加わって皆で歓喜の涙と、数多落涙の状態托白が出るが、母が二度でその他はすべて目蓮の落涙である。この状態托白は目蓮の心を映す「心理托白」ともなっている。状態托白は、本来唱導の性格を具える『地獄巡り』が目蓮への同情をさそい、人々の心を揺さぶる語り物の重要な部分を形成しているといえるのである。

### 3-13 人物の心理描写「心理托白」

三段の六道の辻で迷い「はっと心を御惑いなされ、これではならぬ」と気丈に読誦したり、大蛇が迫ってきても「動き給わぬ悦び顔で」と余裕を見せ、葬頭河姥の恐ろしさにも「羅漢の目蓮」は「唯の少しも動ざる気色」と、「心理托白」で剛胆さも表現する。かく心理托白は、ある人物がこう思ったとか、こう感じたとかを語り手が語るの

ではなく、状態托白や、登場人物の官咄白、私咄白を通して表現したり、釈尊の憐憫や諸鬼の邪慳な心理を官白を通して表現されるのも、『地獄巡り』の大きな特徴である。咄白ばかりか、官白の少ないA系統の方は心理托白がほとんど出てこない。

### 3-14 譬えによる平易化、強調化「比喩補白」

母の罪を「砂子も寄り集まれば千尋たちたつ大岩石よ、糸を集めて大縄出来る、……つもりつもれば罪盤石よ」、母を捕らえる獄卒共が「山も崩るごとくに来たり」、獄卒共は「蟻のたかりし如くに責める」、目蓮が母に同情して「剣飲み込む思いをなし」、法力で大蛇の鱗が落ちるのを「風に草木なびくがごとく」、姥の声を「千の雷一度に寄りたる如く、(福光本)肝も心も砕けるばかり」、死出の山の「四つ峠」は既述「場景表白」に含まれた「比喩補白」のとおり。八面大王の怒りの声は「天に響き地にしみ通る」など、A系統より遥かに多数の比喩が使われ語り表現を豊かにしている。

### 3-15 台詞や独白の真意の伝達「真意補白」

極めて少ない。釈尊の官白中で「僧の衣や御袈裟を見ては、あんな寄れいな衣や袈裟を、こちの目蓮尊者に着せて、しさいぶらせて眺めて見たや、ほしやほしや」という母の官咄白に対し「砂子すなご寄集まりて……つもりつもりて罪盤石よ」と、それが慳貪の大罪であることを聴衆に知らす大切な補白。母が他の餓鬼共も救済されたときに「震動雷電忽ち曇り……」とあるのも、それが深い邪慳の大罪であることを、じつは天候表白を借りて真意補白としているのである。

### 3-16 語り手の人物評「人物評白」

釈尊を「吾ら衆生を西道(済度)の為に、此世八千余度の来迎、後の五百の其の大願は、皆衆生の御為でござる。常に御苦勞遊し給へ、有性非性の引導なさる」とし、B系統では、さらに父の作善を挙げる一方で母の悪業をつぶさに語る。母の罪は最初の『仏説盂蘭盆経』に「罪根深結」とあるだけで具体的には記されていない。以来、そのため日本の目蓮物では具体的に示されたものが少ない。そのなかで、B系統が最も明確に「人物評白」で示したのである。

### 3-17 語り手の述べる教訓「教訓評白」

『地獄巡り』は浄土教が悪人で、かつ元来仏教の救済対象ではなかった女性である目蓮の母がついには済度されたと語って、誰も仏によって救われるという理念を聴衆に

明示し、さらに儒教徳目の孝行を加える。艱難をしのげたのも、偏に目蓮の「孝心」が鬼卒たちを肝銘させるように作ってある。この孝心と読誦、写経の「経の功德」と釈尊の「御慈悲」が至る所に鏤めてあって、「教訓評白」として有効に作用している。

### 3-18 擬声語「擬声声白」

葬頭河姥や八面大王の「カラカラ」笑いや、地獄の門の門が「くわらり」と抜けるなど数例しかない。

### 3-19 擬態語「擬態声白」

これも少なく、大蛇の鱗が落ちる「ほろりほろり」、八面大王が鉄棒で釜の中を「ぐるりぐるり」とかき回す、目蓮の涙「ぼろぼろ」など数例。

### 3-20 決まった表現「套語」

地獄巡りで遭遇する相手とのやりとりが独得である。相手が必ず「そこへ来るは何者なるや」と套語で尋ねる。それに対してほぼ「われは天竺釈迦牟尼如来三の御弟子の目蓮なるが、一人居給う母人さんが罪が重くて（重き業にて）八万地獄、堕ちて苦しみ給ふを聞いて（せめて一度逢とて）母を尋ねて参りてござる」と目蓮は官白掛口で応える。するとまた必ず「昔昔の其の昔より今が今とて（古き昔しや今日迄も、）この六道（かかる地獄）へ僧（御僧様）の来らせ（わたり）給ふと言はためし少なき珍し事よ、親を尋ねて（逢うとて）来る子も無し（なけりゃ）、子を尋ねてくる親も無し」（カッコ内は四段）と返答の官白もともに套語をなしている。僧侶、葬頭河姥、地獄の門番や、八面大王との対面でも、みなこの套語が使われる。また、大蛇や姥や門番に懇願する「性あるならば、己が言事静かに聞、どうぞ案内願ひ申す」も套語である。さらに、恐怖表現も、二段の浄玻璃の鏡に映った母の形相は大蛇で三途の川に出てきた大蛇とほぼ同じであり、母の本性はじつは大蛇としている。葬頭河姥の眼が「眼百千鏡の如く」とあり、関連して八万地獄の門外の鬼も「目日月鏡の如く」としている。二段の獄卒などの鉄棒は五段の八面大王とも「九丈二尺」、四段の三途の姥も「九丈」。また、母が地獄に堕ちるときには、二段も五段も同じく「天気も暫時に曇り、天火稲妻はたはた雷」「震動雷電、忽ち曇り、天火稲妻はたはた雷」とほぼ決まっている。どれも、恐怖を誘う套語である。また語りの口調で、ある地獄から次へ移るときに「末の地獄へ急がせます（趣き給う）」、到着すると「急ぎ給えば早程となく」と場面の繋ぎの套語があって、節のついた語り物が套語を用いるという普遍的現象を具

えている。套語は音調を調べ印象づけて記憶しやすくする作用があって、語り物には必ず用いられるが、多用すると物語の新鮮みや臨場感が乏しくなる。B系統『地獄巡り』では、それを動作托白、状態托白、さらには套語を使用しない多くの官白、咄白によって新鮮で臨場感溢れるものになっている。

### むすび

以上から、『地獄巡り』の語り物の特徴を見ると、官白、官咄白、私咄白が比較的多く、それが面白味を増している。しかも、それらで登場者の掛口表白と心理托白をも表すことに成功している。これらの傾向が強いと演劇的、絵解的と考えがちだが、官白掛口が少なく掛口表白が多いので演劇的でなく、まさに語り物であることを示す。また、南宋末版『仏説目連救母経』にはほとんどない場景表白、天候表白、開相、物品開相が効果的に使われていることで、絵解的でもないことがわかる。仏教唱導の一種ともいえるから、多くの読誦・写経の動作托白が出てくる。それで単調に陥らないようにしているのが、再三出現する目連の落涙の状態托白で、そこに人間味が描かれているのである。挨拶の対話をのぞくと、套語の多くは恐怖表現になっている。それが恐怖の形式化を生んで、恐怖の軽減にも繋がっているのは、わが国仏教唱導の智慧かも知れない。閻魔殿の業秤の表現や大蛇の阿難との対話、葬頭河姥や八面大王など怖ろしいものに対する動作托白にも、少なからず滑稽味が見られる。こうした表現は、他の目蓮物には全く見られず、B系統がわが国「庶民仏教」の世界をよく表している。五来重博士は、わが国の地獄が中国のものとは異なる伝統の上に形成されていると指摘された<sup>(46)</sup>。日本固有の伝承があって、すべて大陸からの伝習ではないのである。しかも、五来博士の所謂わが国で著名な源信の『往生要集』とは別系統の、日本の大らかさが、上記の滑稽味などによく表現されている。さらに言えば、日本の地獄状景を描く偽経『地藏十王経』ともまた違う、まさに真の「日本庶民仏教の地獄」の姿がこのB系統には語られている。この無名の作者が編みあげた口説の盆踊唄は、A、B両系統で詞章の句型が異なる。出入はあるが、前者は「われは・じごくへ・おちはせず／しゃかむに・ぶつ・じひにより」というように3・4・5/4・3・5を基調とした七五調の詞章、B系統は「ふかく・よろこび／ころもの・そで」と3・4/4・3とか、姥が衣を「はぐも／はぐぞや／さんべん／はぐぞ」と3・4/4・3を基調とした七七調というふうにも明確な相違があるけれども、両系統とも添え字を加えたりして覚えやすいように韻文口調になっており念じても耳に快い。この形式的な枠が一応は詞章

を縛っているが、字余り、字足らずも少なからずあって、かえって言葉を生き生きとさせている。中国伝来の仏教唱導が、日本化を経て大衆教化の役割を果たしてきた。ここには、日本人の死後の世界と救済が如実に表れていて、五来重博士がまさに指摘されたように、中国オリジナルとは違う構造があるから両者を峻別することが肝要で、そのルーツをすべて中国に求めて類似のものと無理に符合させるべきではない。おそらく日本古来からの死生観の上に成立したものであるからだ。それが、このB系統『目蓮尊者地獄巡り』には見事に結実した日本的仏教唱導芸能の形で表れている。『目蓮尊者地獄巡り』は、年中行事の盂蘭盆会に付随してきたからこそ絶えずに伝わってきたともいえよう。本来、「目連救母」の故事は盂蘭盆の縁起だから、盆踊唄に採用されて当然なのだが、おそらく江戸の中期には目蓮の故事が徐々に日本人の脳裏から忘却されてゆき、盆踊唄からも次第に除外されていったと思われる。そうしたなかで、浄土宗の影響が強かった北陸地方で、遙か昔に淵源をもつこうした味わいのある物語が、無名の民衆によって創作され、唄い継がれてきたことは真に興味深いことといわねばならない。

## 註

1. 「目連救母芸能初探」(『人文学研究所所報』第二二期 神奈川大学人文研究所 1989年所収)。14頁～27頁。
2. 「日本遺存盂蘭盆踊歌」(『中華戯曲』第十七期所収 山西古籍出版社 1994年 太原)。162頁～172頁。
3. 倉石博士「『目連變文』紹介の後に」(『支那學』第四卷第三号所収 1927年)130頁～138頁。博士は、「宇留藤太夫直傳」と書かれたもので、「金澤みやげ、まきの八」と註されている、明治19年「復刻」の「一小冊子」を所蔵されていると述べられ、最後にその第五段の中間部分を引用された。川口博士「敦煌變文の素材と日本文学」(『日本中國學會報』第八集 1956年)122頁～123頁では、石川県石川郡白峰村で毎年おどられている桑島の盆踊りを現地で御覧になり述べられた。岩本博士『目連傳説と盂蘭盆』(法蔵館 1968年)。50頁～170頁。石破氏『地獄絵と文学』(教育出版センター 1992年)137頁～176頁。石破氏は旧稿を纏められて一書とし上梓された。陳氏『目連救母故事之演進及其有關文学之研究』(国立台湾大学文学院 1983年 台北)111頁～121頁。
4. 北陸地方以外でも、酒井董美氏の島根邑智郡羽須美村阿須那旅泊『目蓮尊者くどき』(『島根大学法文学部紀要・文学科編 第19号-1』1993年所収)や、『大分県の民謡』(大分県教育庁文化課編 1975年所収)などの報告もある。『地獄巡り』に比べ、ともに物語性に乏しいけれども、かつて日本各地に目連故事が盂蘭盆とともに浸透していたことを知る。
5. 例えば、大橋甚吾本『目蓮尊者御一代記』の奥付には、「明治十九年四月廿七日出版御届同 五月廿五日 刻成 富山縣平民 編輯及出版人 大橋甚吾 越中國上新川郡 富山西

町十五番地」とあり、塩谷与右衛門本『目蓮尊者地獄巡り』の奥付にも、「明治十九年八月三十日御届 同年九月 刻成 編輯兼出版人 塩谷与右衛門 越中国射水郡高岡定塚町一番地」とあって、A系統ではあるが富山県内で発行されている。また、黒坂富治編『富山県の民謡』（北日本新聞社 1979年）では、黒部市に『千秋楽（目蓮尊者）』245頁、中新川郡上市町の『目蓮尊者地獄めぐり』と『歓喜嘆』268頁～269頁、上新川郡大山町の「サッサ」298頁～300頁、それに『富山県民謡緊急調査報告書』（富山県教育委員会 1985年）にも、婦負郡猪谷の「かわさき」『目蓮尊者地獄巡り』89頁があり、これらには一部しか記載がないが、富山県内に伝わっているA系統であることの証左である。

6. 石川、富山両県だけでなく、京都で明治28年出版された絵入り西村宗貫本『目蓮尊者地獄巡り』や、上記岩本博士著書に掲載されている京都大学国文学所蔵頰原文庫本（無刊記）、東京大学総合図書館霞亨文庫所蔵本、そして早稲田大学演劇博物館所蔵本などは多く「宇留藤太夫直傳」と記されるもので、抄本だけ現存のB系統と大きく異なるのは、これらのように開板された版本が出ていて文字の異同も少ないことである。
7. 福光図書館所蔵の『砺波の民謡』（ちんがれ集）上巻「ちんがれ節に就て」（斎藤五郎平著 自家出版 1981年）に、「ちんがれの台本は……なにしろ昔の人が耳で聞いて覚えたことを筆にし、それをまた借りて写しているうちに、誤字、脱字、それに毛筆のにじり書きが多く、宛字やら発音の聞き間違え、「き」と「け」、「し」と「す」、「ぬ」と「の」、「る」と「り」、「く」と「き」、「ぬ」と「の」、「ち」と「つ」、「む」と「も」などが混同し、万葉仮名「あ」と「お」、「た」と「こ」等、識別がつかない。これらはまだやさしいほどで、相当の難物で、ちょっとやさそとでは読めぬ」とある。
8. 中村茂子氏の「盆踊り『目蓮尊者地獄巡り』の伝承」（『泉州目連傀儡にもとづく日中文化の諸相』所収 日本「目連傀儡研究会」1997年 181頁～191頁）は、主として石川と富山両県の民謡集から現存する地域名を列挙するが、紙幅の関係であろう、遺憾ながら、内容に関しては筆を簡にされた。
9. 天理図書館所蔵 享禄4年奥書（1531年）。
10. 万治年間（1658～61年刊）八文字屋本と貞享4年（1687年刊）鱗形屋本がある。横山重編『説経正本集』第2巻（角川書店 1968年）所収。
11. 「廣濟寺の鬼舞 詞曲」（『民俗藝術』第4巻第参号〈民間特殊の演劇〉36頁～42頁地平社書房 1931年 所収）。
12. 田中允編『古典文庫』〈番外謡曲集〉15に転載（1963年）、下村家旧蔵書。
13. 両親と死別した時の両親の年齢は、A、B両系統で異なるが、双方の諸本は各々ほぼ統一されている。A系統は父が49歳、母は52歳、B系統は父が54歳、母が32歳、B系統はさらに目蓮その時の年齢は各々5歳（この歳に出家）と7歳とある。ちなみに、『もくれんのさうし』では12歳で出家、母の死は15歳の時、母に会いに行くのは37歳。
14. 釈尊初転の地で今日のベナレスにあたる梵語「波羅奈斯ハシナン」国に擬したものか。
15. 鷹栖本では「ていおうりんたゆ」、上平村本『目蓮尊者地獄巡り記』では「原内国の諧茂輪大夫（ておくりんだゆう）」、城端町本『目蓮尊者冥途行願』では「波羅国で超輪大王」、氷見市や西礪波郡福光町本『目蓮尊者地獄めぐり』では「ハラナイ国の……チョウレン大夫」など、数種あてられている。これに対して、A系統がほぼ「用飯大王」「ようぼん大王」と統一されていて、ここにも鮮明な区別がある。『もくれんのさうし』では甘露飯王、説経



- 節『目蓮(連)記』では、「からも国」の「くる大王」となっている。
16. ここに挙げられているのは仏教の典型的な作善の例。説経節『阿弥陀陀割』でも「大がには舟をうかべ小川にははしをかけ」とある。
  17. 目連故事で来迎の様子を語ったものは少なく、元刊『目連救母離地獄生天宝卷』が早期のもの。A系統にもまったく見られない。B系統では、母が地獄に引き連れられるのと来迎が好対照をなし、先に提示している。
  18. 上平村本では「処大扈女」とある。B系統では母の名の書写に苦心しており、鷹栖本は「小大しやう」、福光本(本回り)は「ショウダイブ(ム)ジョ」などと、表記が一定しないのに対して、A系統では、説経節の「せうたいふ人」(鱗形屋本)や「じょうだいぶにん」(八文字屋本)と、中国の原名「青提夫人」の漢音、呉音に準じ、ほぼ統一されている。おそらく、B系統の方は、書写人が中国での原名を知らず、理解せずにただ音をきいてそのまま書写したり、草書体を模倣したり、むりやり宛字を当てたためにこのような不統一になったのであろう。因みに『私聚百因縁集』巻第二では「青提女」「靖提女」と作るものがある。上記の石破洋『地獄絵と文学』173頁には平康頼『宝物集』(1180年代)に「しやうたい」「精提」「成台」と表記しているとある。
  19. 三宝を誹謗するという母の罪を明確にするために殊更この事柄を入れている。A系統には全くない。
  20. A、B両系統で「妬みそねみが絶えやらず」そして「手には取らねど心の盗み、塵が積もれば山となる」と母の罪をあげる。わが国の目連物において、母の罪は一般的にこの「邪慳」「慳貪」といった抽象的なものであるが、この『地獄巡り』では、父の建てた堂塔を焼き、橋や舟を壊し、心の盗みをあげ、B系統ではさらに僧侶を侮辱するといった具体性を有している点が大きな特徴である。
  21. 阿難尊者の救済は後で三途の川を渡る時にも出るが、A系統のみならず他の諸本にも全く見られない。
  22. 死出の山はわが国平安時代の偽経といわれる『仏説地藏菩薩発心因縁十王経』(以下、『地藏十王経』と簡写)に人間が死後最初に行くところとされるが、中国にはない。A系統には「死出の山」が「四つ峠」として表されている。B系統では「四つ峠」を「死出の山」という名称では呼んでいない。
  23. この「業秤」は中国の敦煌変文、『目連救母出離地獄天生宝卷』(1337年奥書)や鄭之珍『目連救母勸善戯文』(1582年刊)、そして他の日本の目連物にもほとんど見られないから、『地藏十王経』の影響があるだろうと思われる。
  24. 浄玻璃の鏡はまた中国名の「業鏡」とも呼ばれ、閻魔殿に出て来るというもの、『地藏十王経』に見られるが、「業秤」は該経の四殿「五官王宮」にあるのに、B系統『地獄巡り』では五殿閻魔王のところに業鏡と一緒におかれている。恐らく、これもわが国の通例かと思われる。また、鄭之珍『目連救母勸善戯文』下巻「五殿尋母」の段にも業鏡は出てくる。澤田瑞穂『(修訂)地獄変』(平河出版社 1991年)86頁~88頁によると、罪を秤ではかる着想は南朝斉の王琰『冥祥記』に見え、生前の罪を鏡に映すのは宋代の『太平広記』や『夷堅志』にもすでにあるという。
  25. このように目蓮の地獄巡り以前に母が閻魔のところへ引きつれられる場面を、八文字屋本三段目に「火の車を轟かし雷電稲妻しきりにて天地も響くばかりにて、妃(母)の死骸

をひつつかみ虚空をさしてぞ失せにけり」とあり、その後で、閻魔殿に連行され、閻魔の前で「しやうぼんのかがみにかけ」られて「しやばにて作るつみとが」を映されるまで、その過程が類似する。鱗形屋本は、尼が今生の楽しみは刹那のことで来世を祈願せよと勧めるが、母は「ながきらいせとやらは、みたる者もあらざれば、此世の怠いがこそ佛なり」と反論したので、尼に化けていた羅刹が「ながきらいせのくげんを見せん」と「ひつつかんで、こくうに行とみえしかば、八まんぢごくにおとしける」と語ってから、これも話を霊鷲山の目蓮に移している。

26. 『もくれんのさうし』では37歳の時クシナ（拘尸那）城で法事をしていて急死し地獄に17日滞在するとあり、八文字屋本では病没して冥途に行き14日滞在するという。A系統も15日間の地獄巡りを許されるが、B系統のみ百日百夜ととくに長い。
27. 井波本が「兼求笠」「兼求蓑」「耆婆の屈」とある以外は、鷹栖本や福光本は「かん原笠」「かん原蓑」に「きばのくつ」とする。この「かん原」は梵語の自らの悟りだけでなく衆生を済度しようとの誓願を完成する「願波羅蜜」と関連があるかも知れぬ。A系統はただ、白い帷子と衣に袈裟とあるだけで、死出の山は読誦だけでしのいでいく。それだけ、読誦の法力を強調しているともいえる。
28. 本来釈迦の信頼あつた名医で薬師如来の化身も言われる梵語「耆婆」と関連があるかも知れぬ。因みに『地蔵十王経』では、「亡人向入死山、……踏石願鞋」とあって、亡者は「踏石」の辛さを訴える。室町時代の地獄遍歴譚『平野よみがえりの草紙』（岩本裕『仏教説話研究』第四巻280頁所引 開明書院 1979年）に「足を踏み止むべき様もなく、険しきこと限りなし。巖岩石は剣の如くなり」とあるのが、当時の死出の山に対するイメージであったろう。
29. 『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』の三経。
30. B系統『地獄巡り』では井波本で「結文経」、福光本には「吉文経」とも作る。
31. 敦煌変文『大目乾連冥間救母変文』では、8、9人のそぞろに歩く男女に遭いそれが閻魔大王の居場所を教えてくれる。八文字屋本五段目には、7人の僧が現れ目蓮に閻魔の所へ行く道を教えると、『地獄巡り』同様に消え失せてしまう。A系統では冥途の案内・地蔵菩薩が道を教える。八文字屋本も地蔵菩薩。
32. 八文字屋本五段では、ここに日本独得の「賽の河原」をもってきているが、A、B両系統とも一切出ない。
33. 『地蔵十王経』の順番なら、死出の山→三途だが、『地獄巡り』では逆（二段に母の地獄行きに死出の山を越えるとはあるが、実際の描写はない）。A系統でも、三段に「三途の大河、死出の山」という順番。因みに「鬼来迎」も最後に死出の山。
34. A系統にも同じく大蛇に乗ることが出ているが、ただ「大蛇、弘誓の舟と転じ変われば」とあるだけで、それが阿難であるなどということは全くない。
35. A、B両系統とも、「三途の川」とは、別に「葬頭」に姥がいる。抄本の宛字だと、A系統では「志やう寿可者者（しょうずがばば→葬頭が婆）」、B系統では「寿やう志原乃老母御前（しょうじがはらのろぼごぜん→葬頭が原の老母御前、B系統は「しょうじ」とし「生死」「清水」などの漢字が宛てられる）」とあって「三途の姥」とはしない。八文字屋本五段も「しやうず川のうば」としている。『地蔵十王経』は「葬頭河」のみで「三途」の文字はない。B系統では葬頭川原で姥に遭い→死出の山→血の池地獄。A系統では死出の山

→葬頭河姥→八万地獄。三途の川は敦煌変文の『大目乾連冥間救母変文』で「奈河」川辺に無数の罪人がいて服を木に懸けて大声で泣いているとあるが、姥は出現しない。これに対して、姥はわが国の目蓮物にも不可欠のもので突出している。富山県魚津市の大徳寺所蔵『立山曼陀羅』のような絵解にも表れているし、『鬼来迎』や廃曲『目蓮』ではシテとして演じる。『地藏十王経』第二初江王宮には「宮前有大樹，名衣領樹。影住二鬼，一名奪衣婆，二名懸衣翁。……婆鬼脱衣，翁鬼懸枝，顯罪低昂」とある。但し「懸衣翁」は一切出現しない。『もくれんのさうし』に「三つのうはどて，きちよあり，さひ人のいしやうをはぎとり，ひらんしゆといふ木にかけをく」と述べ、八文字屋本五段には姥御前に閻魔殿へ行く道を尋ねるが、やはり「さもおそろしきうばごぜん，もくれんにうちむかい」とあって上着をわたすように求めている。上記『平野よみがえりの草紙』281頁にも、「罪人の帷子ともを尽く剝ぎ，この木に懸くる。罪深き者は帷子重くて大なる枝，地につく程たむむなり。姥これを見て「汝が罪の重きを見よ」とて……罪を言い立て内問する恐ろしさ限りなし。それより裸にて，泣く泣く通り候なり」と、恐怖心をあおっている。すべて庶民仏教の冥途を描いたものは、わが国の姥に対するこうしたイメージの上に成立していて、中国や上流階級の地獄と異なりとくに日本の目蓮物に顕著といえよう。

36. 『私聚百因縁集』（『大日本仏教全集』92所収 鈴木学術財団 1970年）巻第四第二には「衣ナケレバ身ノ皮ヲハグ」とある。
37. A系統はB系統とちがって「岩降り」「火降り」「剣」「暗闇」の順序になっていて、かつそこに「見る目、嗅ぐ鼻」という罪の軽重を分ける者がいる。本来の葬頭河原で着物の重さによって罪人の罪の重さを婆が量るのに、それには触れず、ただ衣を木に懸けるだけで目蓮との対話もない。因みに「見る目、嗅ぐ鼻」は八文字屋本の閻魔殿にも「みるめかく花」と出てくる。
38. 八文字屋本に「うますのぢごく」とあるが、具体的な苦患は表れていないし、かつ同時に列挙されたのはすべて六道に属するものである。そこで、日本独得のように思われる。A系統にはなく、B系統は具体的苦患を語り、次に血の池地獄に入る。
39. A系統では五段目でなく、二段の地獄を列べ立てて紹介するとき、同様に「糸より細き橋を架け、あまたの罪人を召し寄せて」、「この橋わたりむかふの岸に着くならば、成仏をとぐべし」と責め立てるとあるが、「罪深き罪人は、血の池地獄に墮ちるなり」とあって女性の罪人の地獄だとはとくに強調しない。これに対してB系統第五段には、明確に「女逃れぬ血の池地獄」とある。鱗形屋本では諸菩薩が『血盆経』を唱え、母が血の池地獄「血盆池」から最終的に釈迦に救われるという重要な意味をもっているが、B両系統では、目蓮が『血盆経』を読誦して罪人達を救うが母は「罪が深こうて」結局は救えないということになっており、八万地獄に重点がおかれている。A系統も同様で、諸地獄の通過点にすぎない。
40. 中国1251年刊『仏説目連救母経』では、釈迦から譲り受けた十二環錫杖を三度振って門が開く。
41. この場面はわが国の地獄絵に常見する独得のものである（上記『説経正本集』第2巻537頁の第十図にもその場の図版が出ているし、B系統と同じ富山県の魚津市慈興院大徳寺所蔵『立山曼荼羅』に、刺叉の先に刺された母が、両手を挙げて嘆く目蓮の頭上に掲げられている典型的な形象で描かれている）。中国では、変文以来、畜生道に墮ち犬に変身するのに対して、わが国の目蓮物では、『もくれんのさうし』の「かめ」に変わったのは例外とし

て、廃曲能楽『目蓮』でも地獄絵と同様「もえ焦がれたる人の形を、鉾のはさきに指し貫いて」とあるのが圧倒的に多い。また、B系統のように「金棒の先に左腕をみぎへとさし」とか、A系統に「黒焦げの母上を鉄棒につなぎ上げ」たけれども、母と判別がつかなかったので、「大王の情けに、娑婆の姿見せ給え」と懇願するのを常とする。A系統も能楽も、ともに呪文を唱えて母を元の姿に戻している。八文字屋本六段目で「ほこのさきにつらぬき、そんじゃのまへにささげる」とあり、娑婆の姿に戻ったようだが、「ぢごくのならいにて、せつなのひまもなきもの」と時間が来たと目蓮母子を別れさせる。これはB系統になくA系統に属する。

42. 「多数罪人共が、釜のめぐりを両手叩いて、左の方へぐるりぐるり三遍廻り、是が此の世の踊り始め。踊り上がって喜びければ、西の方より紫の雲が綺麗はなやかたなびきたるぞ。中に弘誓の舟びかびかと諸仏菩薩が笙筆築で多数の罪人お舟に乗せて現に目出度くさとりを開く」とあり、A系統も末尾に「抑も、七月十六日を盂蘭盆会と名づけて、祝いの踊りを始めけり。さて、踊りの装束は、甘茶の帷子・素麺の帯、蓮の葉の笠にて顔をかくし、踊りしことは末の世の女人戒めのためなるべし」と、ともに『地獄巡り』の踊りの縁起を述べるが、とくに注目すべきは、このB系統の盆踊りを踊ることが、すなわち来迎に結びついていることである。
43. 母の慳貪のため、地獄から救われる寸前でまた墮されるのが目連物の顕著な特徴で、目蓮が釈尊にすがることも、つとに上記敦煌変文に見えるが、この『地獄巡り』も母の慳貪業の深さを如実に描いている。
44. 結末の母が救済され如意輪観音に封じこめられるまでの経緯は、A、B両系統で違う。A系統では、八面大王が母を釜から出して呪文を唱え元の姿に戻して（廃曲『目蓮』と同様）目蓮と対面させるが、すぐ時刻の到来で母を再度地獄へ。釈尊の勧めで千部施餓鬼を行い、目蓮は地獄へ向かい釜の中に仏経を投げ込むと、母ばかりか閻魔、八面、牛頭馬頭など皆救われた。そこで母は息子のお蔭でみな済度されたことが不満だということと再度地獄に墮ちそうになったので、目蓮が母の身代わりになると釈尊に申し出る。釈尊はその代わりに如意輪観音に封じ込めて遍く衆生を守らせようというところで団円となるのである。B系統の方は、目蓮が読誦と写経をして釜に投げ込むことでやっと母を救済し、法華経や三部経を懸命に読誦すると釜は割れ皆が救済される。母が不満を述べたとたん、また地獄へ。そこで施餓鬼の供養をしたら母は救われ、釈尊が「天上へ出世させる」といわれたが、「天に五糞と三熱あれば苦なき所へ」と願ったので、「観音様と封じ込め」と結ばれる。A系統は封じ込めることを邪慳の罰としたのに対して、B系統は邪慳の罪が施餓鬼で救われるようにしたので、順序が反対になっている。施餓鬼供養をしても母の邪慳は直らないでは、この話の眼目である施餓鬼の意義が薄れよう。A系統が「封じ込める」の意義を誤解してつけた結末かと思われる。
45. 『『救母経』と『救母宝卷』の目連物に関する説唱芸能的試論』（一橋大学研究年報『社会学研究』41 2003年 所収）66頁～68頁。
46. 『日本人の地獄と極楽』人文書院 1991年。

[附記]

拙論を書くに当たっては、宮本瑞夫、斎藤雅美、三輪泉などの方々の御示教を賜り、また富山県福光町、井波町の両図書館のお世話になった。ここに、深く鳴謝する次第である。